

よりよい探究活動のために

課題研究通信

Vol.1

巻頭インタビュー

p.2-5

オックスフォード
大学教授

荻谷 剛彦 先生

課題研究に取り組むにあたって ～イギリスより日本の教師・生徒へ～

前編



p.6-9

実践記録 鹿児島県立 甲南高等学校 前編

p.10-13

座談会 課題研究に取り組んで、変化したこと、実感したこと

p.14

岡本先生に聞いてみよう

p.15

高校生国際シンポジウムの紹介

知が啓く。
啓林館

課題研究に取り組むにあたって

～イギリスより日本の教師・生徒へ～（前編）

『課題研究メソッド』を監修いただきました、社会学者の荻谷剛彦先生に、課題研究に取り組むにあたって、取り入れたい基礎の学習、教師に求めたい役割などを、現在勤めるオックスフォード大学での事例を交えて伺いました。今回は、学習の基礎となる読み書きの重要性、アクティブ・ラーニングで気をつけたいこと、探究型の学習における教師の役割についてご紹介します。（全2回）



オックスフォード大学教授
荻谷 剛彦

1955年東京生まれ。オックスフォード大学社会学科およびニッサン現代日本研究所教授。米国ノースウェスタン大学でPh.D.(社会学)取得。2009年まで東京大学大学院教育学研究科教授。専門は現代日本社会論、社会学。著書に『知的複眼思考法』『学校って何だろう』『階層化日本と教育危機』（大佛次郎論壇賞奨励賞）『大衆教育社会のゆくえ』『教育の世紀』（サントリー学芸賞）『Education Reform and Social Class in Japan』など。

1 学習の基礎力としての「読み書き」

批判的思考や主体的な学びの基礎となる力

昨今、特に英語教育や国語教育などにおいて、発表する能力や議論に参加する能力といった、オーラルな発信力を中心に育成しよう、評価しようとしているが、それはおかしいと思う。結局のところ、10代後半くらいまでに、特に課題研究などを通じて身につけてほしい能力とは、「読む」と「書く」を通じて鍛えられる「考える力」だ。

人は考えながら読んだり、書きながらまた考えたり、そして、その内容を伝

わるような表現にしたりと、そういったトレーニングの段階を経て、考える力を身につけるようになるが、おそらく今、日本の教育では、この根底の「読む」「書く」があまり重視されてない。将来、社会に出て求められているような、批判的思考や創造性、主体的な学びといったことの入口では、まずは「読む」「書く」などを通して、立ち止まって考えることから始めてほしい。

「書く」「読む」「考える」の連動

よく「自分の考えを書きなさい」と言

うと、「すでに考えたことを書く」という印象を持たれてしまう。しかし、実は「書いているときに考えている」し、書くことが考えることを促す。というのも、考えながら喋るより、「書く」ほうが、考えを編集する自由度がずっと高い。なぜなら、「考えるのと同時に喋る」よりも「書く」ほうが、1回書いたものを振り返ったり、順番を変えてみたりというアイデアを編集する、時間的な柔軟性が上がるからだ。「書く」ことは非常に重要なのに、まだまだ、それが理解されていない。

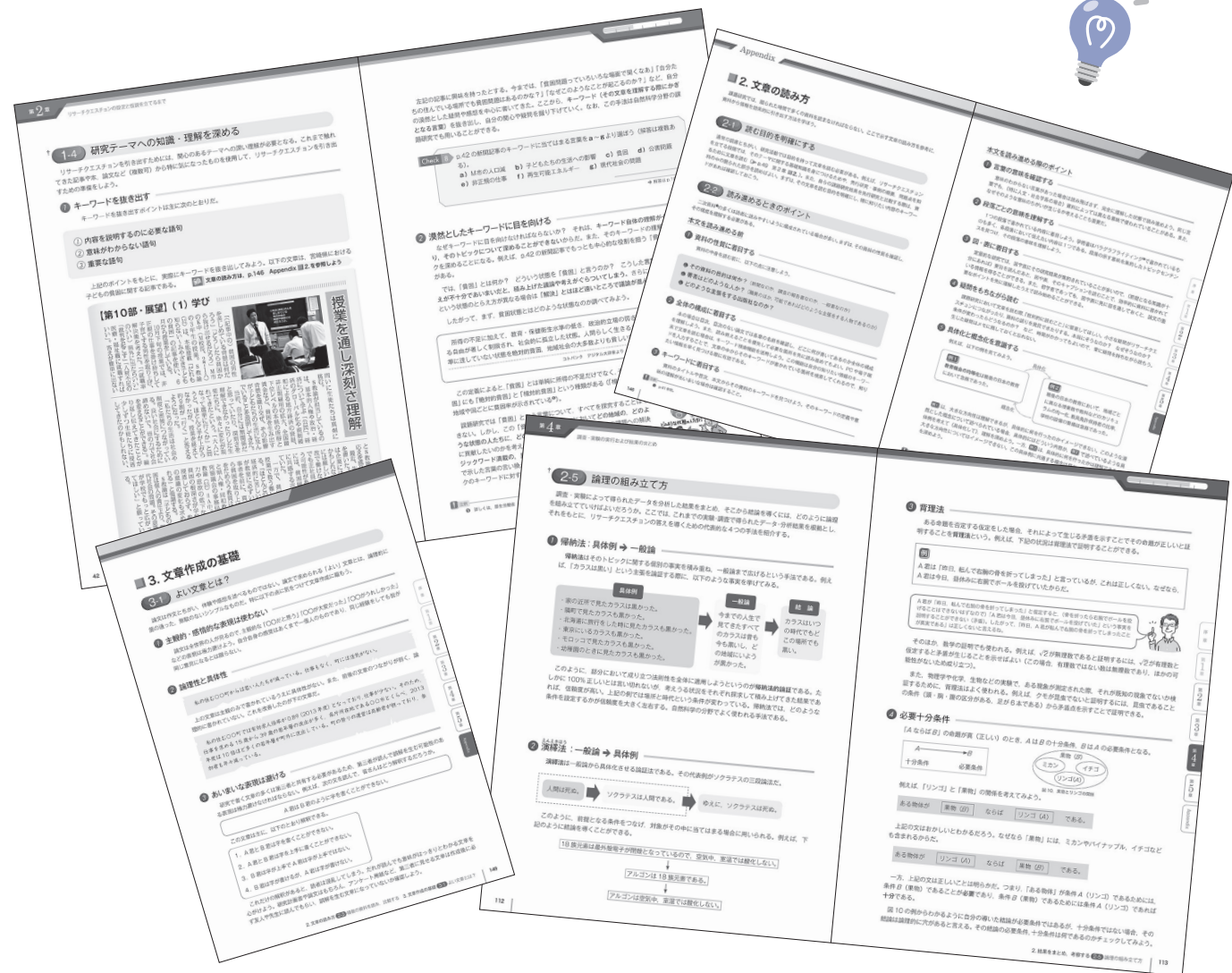
とはいえ、突然何か書けと言っても、書けない。書いたり考えたりするための材料は、「読む」からくる。「読む」というと、知識を得ること、すなわち「暗記する」「知識を蓄える」ためと、誤解して捉えられることが多いが、良い教材があり、読み方をきちんと教えれば、「読む」のにも、考えることが必要だ。特に、文章を書いた人がどう考えているのかを想像しながら読むことができるようになると、その文章がどうできあがったかというプロセスを追うことができ、考えながら書くということと連動するようになる。

思考を育てるトレーニング

「読む」「書く」そして「考える」ことは連動しているので、地味な作業であっても、そのトレーニングに時間をかけてじっくり取り組むのは重要だと思う。

例えば、最初は短いコラムなど良い教材を読ませる。読みながら、著者が言っていることは何なのか、想像したり要約したりすると、著者の考えを追体験できる。今度は、それをほかの言葉で言い換えるつもりで、自分の文として書いてみる。そうすると、その著者が言葉として考えを「書いた」過程をなぞっていくことができる。それを重ねて

いくと、アイデアが膨らんだり、考えるトレーニングになったりする。これはすべてのものを読むときにそうするわけではなく、あくまでトレーニングのためのものだが、この「読む」と「書く」をトレーニングすると、喋れるようにも聞けるようになる。聞けるようになるというのは、要点をつかみ、それを使って、自分で考えられるようになるということだ。でも、それをいきなり「話す」から入って、全部一度にやろうとしても、無理が出て、薄っぺらい議論しかできなくなってしまう。



文章の読み方に関しては『課題研究メソッド』のp.146～148「Appendix 文章の読み方」およびp.42～46「研究テーマへの理解を深める」、文章の書き方に関してはp.149～153「Appendix 文章作成の基礎」、p.112～117「論理の組み立て方」「考察を行い、結論を導く」などを参考。



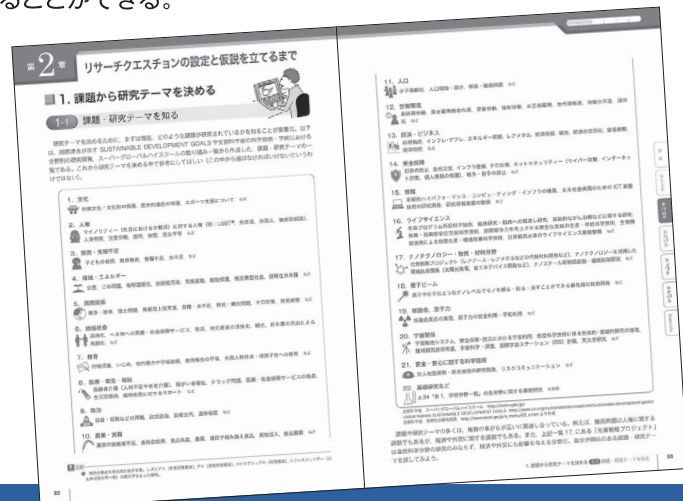
2 アクティブ・ラーニングで 気をつけたいこと

「アクティブ」に重点が置かれる現状

アクティブ・ラーニングで怖いのは、薄っぺらい議論になってしまうこと。一生懸命発言していれば、見た目は活発（アクティブ）に参加しているように見える。そして、生徒が本当に考えているかどうかを教師が読み取れずに、オールコミュニケーションを中心にした発表をゴールに置いてしまうと、分かっている人から見れば、薄っぺらで、深まらない議論にも関わらず、良いパフォーマンスができれば「よく頑張ったね」で終わってしまう。議論や発表の形式を当てはめるガイドラインを使い、それに沿わせて活動させるだけでは、形式主義的なものしかできない。見た目の行動がアクティブなだけで、頭の中がアクティブにラーニングしていない議論は、本当の意味での活発な「学習」にはならないのだ。見た目がアクティブかどうかをゴールに置いてしまうと、本来の何を学ぶかという目的も、不明瞭になってしまう。

「ラーニング」をゴールに据える

頭の中が活発に動いた状態の「ラーニング」を目指すにしても、子どもたちの議論が深いものになっているかどうかは、教師自身が普段から考える力を鍛えていなければ見抜くことはできない。そのためには、普段から教師自身が、「読む」「書く」「考える」といったトレーニングを積むことが重要になる。時間に余裕がないならば、自分にとって取り組みやすい専門教科の内容を使ってみたり、新聞や雑誌の短いコラムから始めても良い。そうやって、教師自身がトレーニングをしていくことで、生徒の学習の浅さや深みを見抜ける教師になることができる。



3 探究型の学習における 教師の役割

凡庸さに気づく

探究型の学習で、教師にとって難しい点は、問題意識や研究に関する知識が生徒の側(頭の中)にあるということだ。知識を分解してピースとして扱い、それを組み合わせたり対比させたりできる。そのピースをどんな文脈に置くかによって、知識を活かすことも、ダメにすることもできる。ところが、初めて研究する生徒にとって、たとえそのピースを形成するアイデアが凡庸であってもそのことに気づけない。

だから、生徒が持ってきた知識を教師が素早く読み取って、どう組み替えたらどうなるかということをイメージし

なければならない。それを読み取ると、生徒の持ってきたもののどこが凡庸なのか、どこでつまづいているのか、何が欠けているのかが分かるようになる。僕たち教師の仕事は、生徒に凡庸さを気づかせ、それを乗り越えさせることだ。それは一般論ではなく、個別の研究を通してでしか教えられない。

指導のための実践

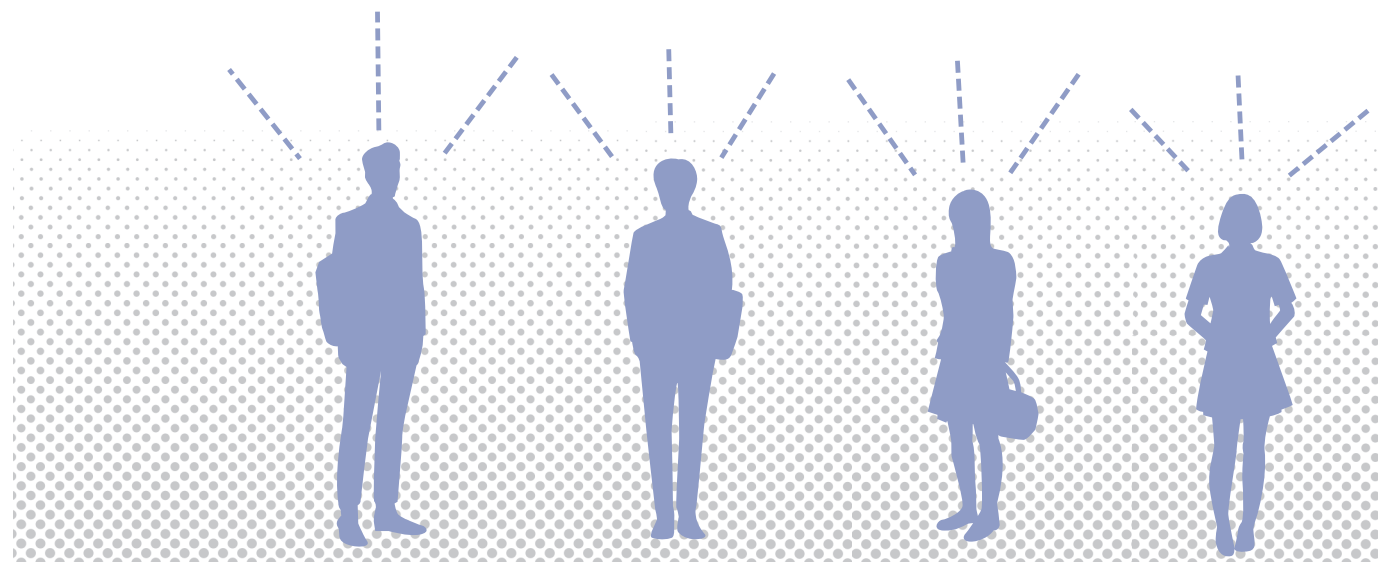
課題研究をはじめとする、研究型の学習を教えるためのスキルを鍛えるには、教師自身がリサーチャーのマインドを持つことが不可欠だ。かつて学生時代に研究を経験したことがあっても、自身で普段から経験を積んでいないと、知識のピースの組み立て方、引き出し方などを忘れてしまったり、さびついてしまったりする。リサーチに必要な知識の動かし方ができない人に探究型の学習を教えろといっても、無理だろう。

リサーチに必要な知識の動かし方は身近なところから始められる。例えば1週間に1つ、関心を持ってそう短い文章を探して、自分なりに咀嚼し、そこから考えたことを書くという、「読む」「考える」「書く」のセットを重ねる。その中で、考えたことに自分の意見を加え

たり、引いたり、ひっくり返したりと、多様なパターンで知識を動かしていけば、パターン化の仕方も鍛えられる。そうした活動を続けて、最終的には数ヶ月かけて8,000字程度の論文のようなものを書いてみると、気づくことがたくさんあるはずだ。その気づきも、改めてノートに書いて残しておく。こうして自分の研究のプロセスを通して得たものを投影しながら、今度は生徒たちの研究を見る。そうすると、教師として徐々に、生徒の研究を引き上げるポイントが蓄積されていく。生徒たちより高みに立っている分だけ、今度は教えられるようになるのだ。教師自身がリサーチマインドを持って、深く探究した経験が

あれば、生徒が探究型の学習に向かったときにも、生徒たちの頭の中で「読む」「書く」「考える」がどのようにつながるかが、わかりやすくなる。簡単には学術誌に載るような研究ができるわけではないけれど、課題研究を通して、生徒たちは自分なりの探究を身をもって体験できる。凡庸さをどうやって抜け出すか、どんな風にするとほかの人とはちがう見方ができるのか、ほかの人がまだ探究していなかった知識をどう探せるのか。そういったことのおもしろさ、喜びを体験させるのが、僕たち教師の仕事だ。

(次号へ続く)



鹿児島県立 甲南高等学校（前編）

課題研究を授業の一環として取り入れ、『課題研究メソッド』を用いて指導を行っている、鹿児島県立甲南高等学校の先生方に、立ち上げのきっかけや、具体的な実践内容を伺いました。今回は、立ち上げの経緯、そして甲南高校での課題研究の取り組みをご紹介します。（全2回）



今年創立111周年を迎えた鹿児島県立甲南高等学校は、普通科の公立高校。生徒数は960人（2017年10月現在）。人間性“Humanity”、創造性“Creativity”、指導性“Leadership”を備えた生徒の育成を目指している。校訓の「剛 明 直、気高く優しく健やかに」をモットーに文武両道を体現している。きめ細やかな指導のもと、生徒は難関大学へも多数進学。平成27年にスーパーグローバルハイスクール（以下、SGH）に指定された。

1. 立ち上げの経緯

3つのきっかけ……………

甲南高校が課題研究の立ち上げに向かったきっかけは大きく3つの理由があると、同高校SGH担当責任者である堀切教諭は語る。第一に、平成27年度にSGHの指定を受けた甲南高校は、前年度の申請の際、内容が課題研究ではなく調べ学習になっていると指摘され、課題研究に向けて内容を充実させる必要性を感じた。第二に、それまでの総合的な学習の時間では、今後、

急速に変化する社会に対応できるような力が見つからないのではないか、という現場の先生方の危機感があった。第三に、文部科学省が発表した新たな方針、「高大接続」だった。大学入試が改革されるという方針が打ち出され、そこで求められる論理的な分析力や思考力といったものが、今後はさらに必要になるという意識が教員間で高まった。文部科学省から示された「思考力、判断力、表現力」というキーワードも含め、このままでは時代に対応できないと感じた。この3つがきっかけになり、甲

南高校での課題研究への機運は高まった。

このような状況を管理職が理解し、課題研究を強く支持して導入するに至った。さらに、生徒の中に、新たな取り組みに積極的に臨む姿勢があったことも、導入を実現できた理由の一つだ。

素地を活かす導入……………

甲南高校では、平成13年度より総合的な学習の時間を使って、生徒が自分でテーマを設定し、調べたことをレポートにまとめる活動を3年間のプロ

グラムとして行っていた。また、課題研究の導入には、学校がすでに実施していた行事や活動の組織形態、指揮系統も活用された。いきなりゼロベースで始めずに、既存の体制を活用したことで動きやすかったと、堀切教諭は振り返る。毎週行われる「SGH推進委員会」は、教頭・各学年担当者の16人で構成され、各学年で取り組む課題研究の内容も全体で協議する。こうすることで、一つひとつの取り組みについて共通理解が図られ、各学年の課題研究もより円滑に進めることができた。

「そもそも課題研究は、まったく新しいことをしているわけではなく、間接的にも直接的にも、教科と関係しており、先生方が大学や学校で経験していることにも関連しているのです」と、堀切教諭は言う。とはいえ、それを「教える」というのは、容易ではなかった。そこで、指導上の指針として『課題研究メソッド』が取り入れられた。

2. 甲南高校の導入事例

甲南高校のW-KIとは……………

甲南高校では、総合的な学習の時間を「W-KI（ダブル・ケー・アイ）」と称し、3年間をかけて、課題研究と海外派遣事業の2本柱で学習に取り組んでいる。「W-KI」は「わっぜ甲南 イノベーションプロジェクト」の略で、「わっぜ」は鹿児島の方で「とても、すごく」という意味だ。総合的な学習の時間が導入されて以来、「甲南イノベーションプロジェクト（KI）」と呼ばれていたが、SGHの指定を受けてからは、1年次に総合的な学習の時間を1時間増加し、KIを深化させる意味を込めて改称された。

このW-KIでは、図1のとおり、学校全体のテーマとして「人口問題に起因する諸問題の解決」を掲げ、3年間を通してプロジェクトが実施される。

W-KIは3年間という長期プロジェクトであるが、その途中には、生徒が研究

を発表する機会が数多く設定されている。1年次にはポスター発表、新聞記事や小論文の作成、2年次には高校生国際シンポジウム（p.15）へ参加するが、特に、折々の中間発表を重視していると、堀切教諭は言う。中間発表の機会があることで、その準備に向かう生徒の力が大きく伸びるのだそうだ（2年次は夏休み前および10月に外部講師を招いて実施：次ページカリキュラム参照）。

海外派遣事業……………

甲南高校では、フィールドワークが中心の「学び台湾」と、課題研究発表が中心の「学びにUK」の2つの海外派遣事業がある。1年次の9月は、希望者から選抜で、台湾でのフィールドワークに参加できる（「学び台湾」）。2年次では、学年全体（320名程度）のうち40名が「UK組」、残りが「JP組」とに分かれ、UK組は英語での課題研究発表を、JP組は日本語での課題研究発表を目指す。

特 色

W-KI

W-KIは、甲南高校の「総合的な学習の時間」の名称です。

SGH

甲南高校は、文部科学省から「スーパーグローバルハイスクール」に指定されています。

W-KI

Wazze Konan!! Innovation Project

学校全体のテーマ
人口問題に起因する諸問題の解決

【サブテーマ】 食 環境 ビジネス 観光

「課題研究」と「海外派遣事業」
2つの柱で、3年間かけて取り組みます。



海外派遣事業は甲南高校創立110周年事業として、同窓会の支援により実施しています。



海外派遣事業

台湾やイギリスでの研修をとおして視野を広げます。

1年次 学び台湾

【台湾研修】

Fieldwork
(実地調査)

2年次 学びにUK

【イギリス研修】

Presentation
(研究発表)

W-KI 3年間の学習の流れ



図1：甲南高校W-KI構想図

40名のUK組のうち、最終発表を経て選ばれた15名は、2年次の3学期に、イギリスの大学でプレゼンテーションなどの場に参加することができる(「学びにUK」)。実際、イギリスへ行けるといことが強いインセンティブとなり、積極的に取り組むようになった生徒もいる。

課題研究の取り組み……………

甲南高校における3年間の高校生活では、課題研究の取り組みの度合いにも濃淡がある。

<1年次>

1年次では、総合的な学習の時間を使い、現代社会の諸問題についてテーマ学習を行う。グループや個人で、ポスター発表、新聞記事や小論文の作成を行い、課題解決に必要な情報を収集して内容を分析し、自らの考えを論理的に表現する力を身につけることを目標にしている。

1年生を担当する出水田教諭は、「1年次では、テーマを決めて問いを立て、調べたり、調べているテーマの関係部局の担当者から直接話を聞いたり、データを集め、考察し、発表するという研究の一連の流れを、『課題研究メソッド』を参照しながら、研究を『体験する』機会を設けている」と話す。また、発表の質を高めるため、ほかの生徒の前で発表する場を設け、つまずきを経験させることもある。そうすることで、生徒は試行錯誤を繰り返しながら、本番の発表に臨むようになるという。

<2年次>

2年次では、個人でテーマを設定し、本格的に課題研究に取り組む。日本語での研究発表を目指す「JP組」は、3年次に作成する課題研究論文(マスターピース)作成に向けた、研究のまとめの発表を最終目標としている。また、英語での研究発表を目指し、選抜され

第1学年				W-KI 計画一覧表				平成29年度				
「総合的な学習の時間」がスタートします。この時間では現代社会の諸問題を取り上げて、皆で考えたり、話し合ったりしながら学んでいくことになります。これから想定される未来社会に「自分たち」として参加していくの、貢献できるのか?というのを考える一つの機会としてください。1年次のアプローチの半段はグループ・個人での課題研究、小論文学習、「先駆」に学ぶ私たちの進路セミナー(先輩の進路への訪問)等です。テーマ解決に必要な情報を収集し、内容を分析し、自分の考えを論理的かつ論理的に表現できる力を身につけていくことを大切な目標としています。 1年次の計画は例としてあくまで通年で、さらには、2年次の後半から3年次の1学期にかけて、各自が『課題研究』に取り組む計画になっています。自ら課題を見出し、問題解決のための積極的に行動していく意欲とそれを表現できるデザイン能力を持っている人こそが、21世紀の社会を力強く生き抜いていく人材となるために最も必要な条件です。												
第1学年単元計画・目標												
(1) ポスター発表・新聞発表・小論文を通じて、基本的自己表現能力を向上させる。 (2) 教科横断的学習により、現代社会の諸問題を多面的にとらえ、これからの社会のあるべき姿を考える。 (3) 「先輩」に学ぶ私たちの進路セミナー」では、本校卒業生との出会いを通して、自分の将来について具体的に考える。												
単元評価基準												
問題解決能力 現代社会が抱える問題についてテーマ学習を通して、テーマに関する問題点を把握し、どのように解決できるか考えている。 学び方・ものの考え方 批判的思考力や問題解決能力を育成するために、さまざまな思考法を使って問題の解決に取り組む。 主体的に取り組む態度 班の中で計画的に課題研究を進めるとともに、互いに意見を交換し、よいところを取り入れる。 自己の在り方、生き方 自らの考えをまとめる際に、国際社会の一員として何ができるか地球規模で考える。												
年間指導計画(1学年)												
テーマ	月	日	曜	時間	学習形態	学習項目・内容	学習集団	指導者	企画担当			
地域 研 究 ・ 小 論 文	5	1	月	1	ガイダンス	「W-KI」ガイダンス	学年	総合係	総合係			
				2	大学レベル講義①	日本と世界の現状	学年	外部講師	総合係			
		12	金	3,4	大学レベル講義②	日本と世界の現状と課題	学年	外部講師	総合係			
		19	金	5,6	大学レベル講義③	鹿児島県内の現状と課題	学年	外部講師	総合係			
		20	土	7,8	「甲南塾」	「甲南塾」	全学年	甲南塾係	甲南塾係			
		28	金	9,10	表現力研修①	表現力研修	複数年級	外部講師	総合係			
	6	2	金	11	課題研究メソッド	第1章課題研究とは	学級	正副担任	課題研究係			
		9	金	12	地域研修①	グループ設定、事前調査、仮設構築(問いの設定)	グループ	正副担任	課題研究係			
		13	金	13	地域研修②	調査結果報告作成	グループ	正副担任	課題研究係			
		16	金	14	大学レベル研修事前準備	打ち合わせ	グループ	正副担任	課題研究係			
	7	16	金	15,16	大学レベル研修	ミニブラッシュアップセミナー	グループ	外部講師	総合係			
		17	土	17	地域研修③	調査結果に基づく計画	学級	正副担任	課題研究係			
		19	月	18	進路セミナー②	職場訪問事前準備②	学級	正副担任	セミナー係			
		23	金	19	進路セミナー③	職場訪問事前準備③	学級	正副担任	セミナー係			
	国内 事例 研 究 ・ 小 論 文	9	23	金	20	地域研修④	相互中間評価・調査内容修正など	学級	正副担任	課題研究係		
			21	金	21	小論文コンクール①	小論文の書き方指導	学年	正副担任	小論文係 国語科		
			22	土	22	地域研修⑤	調査内容の見直し、夏休みに向けて	学級	正副担任	課題研究係		
			14	金	23	進路セミナー④	職場訪問事前準備④	学級	正副担任	セミナー係		
		11	20	木	25,26	小論文コンクール②	夏休み中の課題研究の準備	学級	正副担任	課題研究係		
			25,26	木	25,26	小論文執筆、相互評価	小論文執筆、相互評価	学級	正副担任	課題研究係		
1			金	25	進路セミナー⑤	職場訪問発表会	学級	正副担任	セミナー係			
26			土	26	課題研究メソッド	第5章 プレゼンテーションの技法、6ポスター発表	学年	正副担任	課題研究係			
15			金	27,28	地域研修⑥	ポスター作成、発表練習、相互評価	グループ	学年・正副担任	課題研究係			
22			金	29,30	課題研究メソッド	第2章 リサーチスキームの設定	学級	学年・正副担任	課題研究係			
課題 研 究 テ ー マ 設 定	12	29	金	31,32	研修報告	台湾研修「学び台湾」報告会	学級	正副担任	総合係			
		13	金	33,34	課題研究メソッド	第3章 研究手法を学ぶ、発表最終確認	学級・グループ	学年・正副担任	課題研究係			
		27	金	35,36	地域研修⑦	ポスター発表評価	グループ	外部講師	課題研究・総合係			
		31	火	37,38	国内事例研修①	ガイダンス、研究テーマ設定、事前調査、調べ	学級	学年・正副担任	課題研究係			
	1	2	木	39,40	「甲南塾」	「甲南塾」	全学年	甲南塾係	甲南塾係			
		10	金	41,42	国内事例研修②	事前調査・先行研究レビュー、仮設構築(問いの設定)、調べ	学級	正副担任	課題研究係			
		17	金	43,44	SGH研究発表大会	W-KIの授業公開	学年	正副担任	総合係			
		24	金	45,46	国内事例研修③	研究テーマ、仮説見直し、調べ	学級・学年	正副担任	課題研究係			
		8	金	47,48	国内事例研修④	研究報告アウトライン作成・執筆、	学級	正副担任	課題研究係			
		15	金	49,50	表現力研修②	小論文の書き方	学年・学級	外部講師	総合係			
1	2	22	金	51,52	小論文コンクール	小論文執筆、相互評価	学級	正副担任	小論文係国語科			
		12	金	53,54	国内事例研修⑤	研究内容中間発表、相互評価	学年	1学年担当	課題研究係			
		19	金	55,56	国内事例研修⑥	発表内容見直し、新聞作成	学年	1学年担当	課題研究係			
		24	木	57,58	「甲南塾」	「甲南塾」	全学年	甲南塾係	甲南塾係			
	3	26	金	59,60	国内事例研修⑦	新聞作成、修正、発表練習	グループ	正副担任	課題研究係			
		第3回高校生国際シンポジウム(1/31～2/1)					学級	正副担任	課題研究係			
		2	金	61	国際シンポジウム	シンポジウム振り返り、意見交換	学級	正副担任	課題研究係			
		9	金	62	国内事例研修⑧	発表練習・相互評価	学級	正副担任	課題研究係			
		16	金	63,64	国内事例研修⑨	新聞発表評価	学級	外部講師	総合係・国語科			
		18	金	65	課題研究テーマ設定①	ガイダンス、研究テーマ設定、事前調査	学年	学年・正副担任	課題研究係			
3	16	金	66	課題研究テーマ設定②	課題研究メソッド第2章2	学級	正副担任	課題研究係				
	20	火	68,69	合格体験講演	卒業生による合格体験談から、自己の進路選択に活かす	全学年	進路指導部	課題研究係				
※使 用 教 材：『課題研究メソッド』												
※学習上の留意点： ①教材をもとに、様々なテーマについて考えを深め、表現してみる。 ②必修の講義では一斉発表ばかりでなく、グループ活動等も含む。話し合い・調査等には積極的に参加しよう。 ③参加した論文等を読んでおくなど、授業以外の個人での学習が必要であること。												
※ 表 発 機 会： (1)課題研究発表会＝地域研修(ポスター形式)、国内事例研修(新聞記事形式) クラス内で相互評価(3学期)・課題研究(問題解決能力の育成) (2)小論文コンクール(年2回)＝生徒同士の相互評価を行う。 (3)道徳とミニワークショップ内発表会「組ごとの発表」・文化祭の展示で発表												

図2：甲南高校1年次シラバス

た生徒がイギリスでの海外研修を行う「UK組」は、聞き手の関心をひく魅力的な英語プレゼンテーションを行うことを目標の1つに掲げている。どちらのグループも1年次に経験したことを振り返りながら、先生に相談したり『課題研究メソッド』を参照したりして、自分の設定した研究テーマに、1年かけて取り組む。

<3年次>

課題研究の大部分は2年次で終わり、3年次では、それを総括した課題研究論文(マスターピース)を書くことを目標にしている。平成29年度入試では、こうして3年間、課題研究に取り組んだ生徒達が、自身の研究成果をAO・推薦入試で活用し、東京大学、京都大学、大阪大学、九州大学などに合格した。

2 学年		W-KI 計画一覧表 (UK)		平成29年度								
1学期からサブテーマごとに分かれて活動します。現代社会の課題や自らの進路目標について考察する一つの機会として積極的に課題研究に取り組んでください。夏・秋・冬・春の4学期にわたってフィールドワークを実施し、その成果を基に2学期以降の課題研究のまとめへ進みます。また課題研究と並行しながら進路研究も進めます。1学期の職場訪問や2学期のブラッシュアップセミナーを通して、自分の生き方を改めて考え見つめなおすきっかけとしてください。また、適宜進捗状況の報告会や身体表現(表現力研修)等も行われますので、これらを最大限に活かして自分の課題研究や進路研究を行なってください。 2年生の最終目標は、自分の課題研究を英語でプレゼンテーションすることです。												
第2学年(UK組) 単元計画・目標												
(1) 自分の考えを専門用語も交えながら英語でコミュニケーションがとれる。 (2) 課題研究を進め、その内容について英語で発表することができる。 (3) スライド等を使い、聞き手に関心を持たせる魅力的な英語でのプレゼンテーションができる。												
単元評価基準												
問題解決能力		課題テーマに対する適切な文献や情報を見つけ、内容を理解し分析することができる。										
学び方・ものの考え方		レトリックに富んだ発表ができ、適宜相手からの質問に回答することができる。										
主体的に取り組む態度		他者と協働しながら計画的に発表の準備を進めるとともに、指定した期間内に作業を完了することができる。										
自己の在り方、生き方		積極的に英語でのコミュニケーションを心がけ、言語運用能力を高めようとする可以尝试。										
年間指導計画(2年次UK)												
課題研究	進路研究	テーマ	月	日	曜	時間	学習形態	学習項目・内容	学習集団	指導者	企画担当	
		5	1	月	1	課題研究①	グループ分け、ガイダンス、研究テーマ設定	UK	2学年担当	課題研究係		
			12	金	2	進路研修①	職場訪問計画作成①	グループ	正副担任	課題研究係		
			19	金	3	進路研修②	職場訪問計画作成②	グループ	正副担任	課題研究係		
			20	土	4	「甲南塾」	「甲南塾」	全学年	甲南塾係	甲南塾係		
			26	金	5	進路研修③	職場訪問計画作成③	グループ	正副担任	課題研究係		
		6	2	金	6	課題研究②	現状把握と問題意識、仮設構築(問いの設定)	UK	2学年担当	課題研究係		
			9	金	7	課題研究③	先行研究レビュー、仮設構築(問いの設定)	学級	正副担任	課題研究係		
			19	月	8	課題研究④	課題研究発表会	UK	2学年担当・鹿児島大学	課題研究係		
			23	金	9	課題研究⑤	先行研究のまとめ、仮設構築	UK	2学年担当	課題研究係		
	7		14	金	10	課題研究⑥	研究計画書作成・フィールドワーク準備	UK	2学年担当	課題研究係		
	小論文・研究発表	17	金	11	課題研究⑦	研究計画書作成・フィールドワーク準備	UK	2学年担当	課題研究係			
		20	木	12-13	小論文コンクール	研究計画書作成、相互評価	学級	正副担任	小論文係国語科			
		研究計画報告会・研究内容と夏期休業中のフィールドワーク計画(7/26～7/26)										
		9	1	金	14	課題研究⑧	フィールドワークまとめ報告・仮設検証①	UK	2学年担当・鹿児島大学	課題研究係		
			15	金	15	課題研究⑨	フィールドワークまとめ報告・仮設検証②	UK	2学年担当	課題研究係		
			22	金	16	課題研究⑩	現状報告と課題のアプローチ	UK	2学年担当	課題研究係		
			23	金	17	課題研究⑪	プレゼンテーション中間発表準備②	UK	2学年担当	課題研究係		
		10	13	金	18	課題研究⑫	現在までの成果、検証、結論の構築①(課題研究)	UK	2学年担当・鹿児島大学	課題研究係		
			27	金	19	課題研究⑬	現在までの成果、検証、結論の構築②(課題研究)	UK	2学年担当	課題研究係		
31			火	20	ブラッシュアップセミナー①	ブラッシュアップセミナー準備	BSグループ	2学年担当	BS係			
2	木		21-22	「甲南塾」	「甲南塾」	全学年	甲南塾係	甲南塾係				
10	金		23-24	ブラッシュアップセミナー②	ブラッシュアップセミナー(大学教員等による出席講義)	BSグループ	2学年担当	BS係				
17	金		25	課題研究⑭	現在までの成果、検証、結論の構築③(課題研究)	UK	2学年担当・鹿児島大学	課題研究係				
11	24	金	26	課題研究⑮	現在までの成果、検証、結論の構築④(課題研究)	UK	2学年担当	課題研究係				
	8	土	27	課題研究⑯	最終プレゼン作成・研究発表準備①	UK	2学年担当	課題研究係				
	12	15	金	28	課題研究⑰	最終プレゼン作成・研究発表準備②	UK	2学年担当・鹿児島大学	課題研究係			
		22	金	29-30	小論文コンクール	小論文執筆、相互評価	学級	正副担任	小論文係国語科			
プレゼンテーション最終発表発表会(1/4～1/6)												
研究発表・マスタースペース・実地研修	1	12	金	31	課題研究⑱	プレゼン作成研究発表準備①	UK	2学年担当	課題研究係			
		19	金	32	課題研究⑲	プレゼン作成研究発表準備②	UK	2学年担当	課題研究係			
		24	木	33-34	「甲南塾」	「甲南塾」	全学年	甲南塾係	甲南塾係			
		26	金	35	課題研究⑳	国内外研修準備①、シンポジウム発表準備	UK	2学年担当	課題研究係			
	2	2	金	36	課題研究㉑	第3回高校生国際シンポジウム(1/31～2/1)	学年	2学年担当	課題研究係			
		9	金	37	課題研究㉒	研究成果発表	UK	2学年担当	課題研究係			
		16	金	38	課題研究㉓	イギリス研修準備②、国内研修まとめ	UK	2学年担当	課題研究係			
		16	金	39	課題研究㉔	イギリス研修準備③、課題研究発表準備	UK	2学年担当	課題研究係			
	3	16	金	40	課題研究㉕	学級にCUK(3/2～3/12)	UK	2学年担当	課題研究係			
		20	火	41	合格体験講演	卒業生による合格体験談から、自己の進路選択に活かす	全学年	進路指導部	課題研究係			
	※使用教材：『課題研究メソッド』											
	※学習上の留意点：①英語での授業になるので、積極的に英語を使用すること。 ②参加した論文等を読んでおくなど、授業以外の個人での学習が必要であること。											
※発表機会：(1)第2回高校生国際シンポジウム、SGH研究発表大会、文化祭、Oxford大学院生訪問で発表 (2)国内外研修時の関係高校・大学の発表												

課題研究に取り組んで、

変化したこと 実感したこと

鹿児島県立甲南高校で課題研究に取り組み、卒業して大学生になった3名の学生さんと座談会を開きました。皆さんは、甲南高校で課題研究に取り組んだ最初の学年。手探りで課題研究に挑戦する中で、どのような変化があったのか、そして卒業後、どのような効果を実感したかを伺いました。

—— 今日はお集まりいただき、ありがとうございます。まずは、皆さん、課題研究で何をテーマにされたのか、教えてください。

吉留 私は、アフリカの水不足について研究しました。以前からアフリカのことに関心があったんです。あるとき、アフリカの紛争の原因の一つが水不足で、それがいまだに解決されていないということを知り、とても衝撃的でした。それで、水不足が原因で紛争が起きたスーダン共和国で、水を供給する装置を設置しようというプロジェクトを進めることになりました。

山澤 私は、「新しい交通のかたち」という題で、高齢者の交通手段は今後、どのような形が考えられるかについて取り組みました。今、各地で赤字路線が増えて、バスの本数が減らされています。その代替案がないか、自分で調べてみることで、何か変わるんじゃないかと思ったんです。きっかけは、祖母が、バスなどの公共交通機関を使わないと移動ができなくなってきていて、バスが減ることで祖母が遠出できる機会が

減るのは嫌だと思ったからです。

野元 僕は、孤独死をどうやって減らすか、防ぐかということを取り上げ、ホームシェアが孤独死対策につながらないかという研究をしました。孤独死って倫理的なことだけでなく、自治体への負担など、いろいろな問題があります。海外の事例を調べているうちに、ホームシェアの存在を知りました。テーマを決めたきっかけは、テレビで、遺品整理や特殊清掃の会社を取り上げる番組を見て、自分の知らない社会の現状に驚いたからです。

—— 皆さんそれぞれ、自分にとって身近だったり驚いたりしたことをテー

マにしたんですね。では、今度は、課題研究に取り組んでみて、例えば勉強に対する姿勢などでどんな変化が起きたか、お話しください。

山澤 課題研究では、自分で問いを立てて、それに答えようとする、さらに問いが出てくるということを経験しました。すると、普段の授業で問いを解くときにも、「なぜその問いを出すのだろうか？」など、次々と疑問が出るようになりました。勉強が単に鵜呑みにして暗記するものじゃなくなると、学ぶことがおもしろく感じられました。

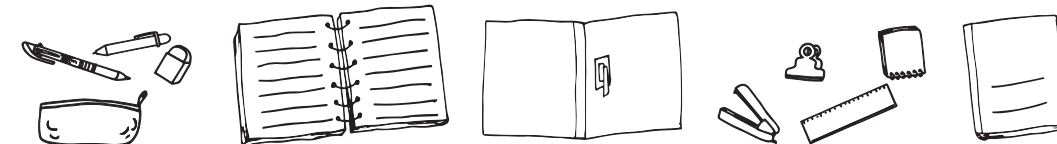
野元 僕も、勉強全般に対してやる気が上がりました。自分の課題研究について、人に何か聞かれたときに答えら



京都大学 経済学部
山澤 優奈 さん

大阪大学 法学部
野元 聡真 さん

東京大学 文学部
吉留 梨央 さん



れないことがあり、自分の無知さを実感したからです。研究のベースは幅広い勉強なんだと感じて、一見、関係ないように思える歴史などの科目も頑張ろうと思えるようになりました。多様な方向から自分の研究を見たら、ちがう発見もありそうだな、と。

吉留 私は、自分の研究をスーダンの大学生と一緒に進めることになりました。スーダンの学生さんたちは知識の量が全然ちがって、自分の興味があること以外にも視野を広く持っていました。どんな分野もないがしろにしないという姿勢があったんです。課題研究を通して、世界の人と対等に話す機会も得て、自分の知識の浅さにも気づくこ

とができ、ほかの教科もしっかり両立しなきゃと思いました。

—— 「両立」という言葉が出てきましたが、ほかの科目の勉強や、部活動との両立は、どのように方針を立てていましたか？

山澤 両立のさせ方は人それぞれでしたね。私は、課題研究がほかの勉強へのやる気にもつながっていたので、通常科目の勉強に疲れてきたら、課題研究のことに手をつけてみるというようにしていました。課題研究を進めるうちに、「ああ、ほかの教科もやらなきゃ」という気持ちになって、結局、通常科目も頑張れました。それに、課題研

究をしているせいで成績が落ちたね、とは言われたくなかったんです。

吉留 私はスーダンと時差があったので、関係者に連絡ができる時間が限られていました。制限があったから、「この時間までは、通常の勉強に集中する」などと区切って取り組むことになりました。私は1つを優先させるといよりは、やることはどれもきっちりやりたいタイプなので、ガチガチにスケジュールを立ててやっていました。

野元 僕は全部のことに100パーセントの力を出すのは無理なタイプです。部活も生徒会もやっていたので、毎回、優先順位をつけるようにしました。例えば、行事の前は生徒会のことを頑張るとか。8割くらいで結局は全部頑張るといった感じでした。1年生のときの担任の先生に、優先順位をつけるといいとアドバイスもらったんです。

吉留 ある1つのやり方がみんなに合うというわけじゃないと思います。だから、みんな自分のやり方を見つけることが大事だったと思います。





—— 課題研究は必ずしも大学入試とは直接つながるとは限らないけれど、そういった焦りはあった？

野元 僕は元々勉強がそんなに嫌いだったわけではないんですけど、課題研究から学んだことがたくさんあったというのは実感していました。自分が、自分のために勉強しているという実感もあって、遊んでいたわけでもないし、頑張ってきたという自信も持っていたので、マイナスに捉えたことはなかったです。こんなに良い勉強ができたのだから、なんなら落ちちゃってもいいや、と思っていました(笑)。自分なりに、勉強も頑張っているつもりでしたし。

—— 高校を卒業して、大学生活や日常生活の中で、何か変化や成長を感じたことはありますか？ 課題研究が役に立ったことなど。

野元 まずはプレゼンテーションだと思う。スライド資料を作ったりするのも含めて。

吉留 確かに。スライドが文字だらけで情報を詰め込んでいる人よりは、情報を整理して、資料を作ったり伝えたりできるようにはなっているね。

野元 周りを見ていると、とりあえず調べたことをそのまま発表にしている、自分の意見や考えが入っていない人が多いことに気づきました。高校時代に課題研究で発表する機会が多くあった

ので、意見や伝えたいことを発表できるようになったと思います。

山澤 レポートを書く課題についても、周りとかいこうと感じます。私たちは高校で経験してきたけれど、そうでない子たちは、大学に入って、まずその部分から学ばなきゃいけないから、大変そう。

吉留 課題研究をしていたから、ほかの受験生みたいにガンガン試験勉強だけをしていたわけではないけど、課題研究を通して、自分が何をしたいかを見つめる時間がありました。だから、大学に入ることがゴールじゃなくて、大学に入って何を勉強したいか、そこから将来、何をしたいかまで考えられていたのは、良かったと思います。

山澤 周りの子が、ほかの人が書いたことや考えたことにあまり興味がなさ

そうなのも、ちがう点だなと思います。課題研究をやっていたからこそ、自分で調べて論文にし、ほかの人の発表を聞くことも楽しめるけれど、みんながそうというわけではないんですよね。

吉留 あと、授業中や日常生活の中でも、わからないことについて大人に聞きに行くことに抵抗がなくなったというのは、大きいです。わからないと私が感じたことについて、聞きにいった良いと気づけたのは、課題研究をしたからだと思います。

山澤 相手が大人だから、とか、自分より上の立場だから、というよりも、自分が大事だと思ったことは言えるようになった、聞けるようになったのは良かったことだと思います。



—— では最後に、課題研究に取り組もうとしている学校や、すでに始めている後輩たちに、メッセージをお願いします。

山澤 そうですね。課題研究は、入試対策など、ほかのことの妨げになるんじゃないかと考える人もいます。でも、課題研究は大学に入ったあとの自分の生活を成り立たせるには大事なことだったと実感しています。だから、どうせ時間を割いて取り組むなら、とことんこだわり抜いて、誇りに思えるような学びをするほうが将来のためになると伝えたいです。大学に入ったあと、どんなスタート地点に立っているのかが大きく変わります。逆に、課題研究をやらなかった人は、大学に入るまでに、アンテナをしっかりと張って、課題研究してきた人と一緒にスタートに立てるように情報収集をしておくとか良さそうだと思います。

吉留 今、課題研究に取り組んでいる人には、もちろん頑張ってほしいです。気が乗らないときや上手くいかないときもあるとは思いますが、やって良かったと思う瞬間が、どこかのタイミングであります。私は、大学に入って、自分の考え方が広がったことなどを本当に実感しました。課題研究は良かったけれども、日本中のすべての高校生が絶対やらなくちゃいけないとも思っていない。学び方や考え方は人それぞれだと思います。ただ、自分で興味のあることについて考えるといった機会が高校生の時期にあったかどうかは、その先の進路にも大きく関わることだと思います。関心を持ったことについて調べて考えてみる、ほかの人の意見を聞いてみる。そういうことから始めたら良いんじゃないかと思っています。

野元 2人は、元々の関心を突き詰めていったと思うけれども、僕は、特にこ

れといったテーマがない状態で課題研究を始めました。たまたま少し関心を持った「孤独死」というテーマで研究をしたけれども、結局、例えば、吉留さんが強く抱いたほどの熱心さにはならなかった。そうやって、熱中しきれなかったり、興味の対象があまりわからなかったりする人も多いと思うけれども、「1つのテーマで研究に本気で取り組んだ」という経験は、自分の視野や可能性を大きく広げてくれると思います。多様な考え方や価値観に触れることもできるし、自分を見つめ直すきっかけにもなります。課題研究が、入試の点数を直接的に上げるようにはならないかもしれないけれど、人間として、成長できたと思います。大学に入った今、課題研究に取り組んだという経験が大きな自信やモチベーションになっています。課題研究は絶対に将来の糧になるので、ぜひ勧めたいです。

—— 皆さん、ありがとうございました。



岡本先生に 聞いてみよう

回答者

『課題研究メソッド』著者
一般社団法人Glocal Academy 代表理事
物理学博士

岡本 尚也



課題研究がなぜ必要とされているのでしょうか？ 大学入試との関連について教えてください。

ご承知のとおり、現在2020年(平成32年)度に向けて、教育改革・入試改革が進められています。これら改革により、これまで主に推薦・AO入試と親和性の高かった課題研究が、一般入試の評価にも直接的に関係するようになって考えられます。

まず、一般入試においても、調査書や志願者本人の記載資料が積極的に活用されるようになります。どのような事項を記載するかは文部科学省より例が示されⁱ、調査書は総合的な学習の時間での取り組みについての記載欄が拡充され、志願者本人の記載資料は、課題研究などに関する活動を記載し、その研究テーマを選んだ理由や概要、成果に関して記述することが求められています。また、高大接続の観点から、出願資料は「各大学が、学部などの教育内容をふまえ、入学希望理由や学びたい内容・計画、卒業後を見すえた目標などを記載させる」とあり、課題研究と結びつけた内容を記載することで、より説得力のある資料になると考えられます。

また、これまで推薦・AO入試を実施していなかった東京大学、京都大学が、2016年(平成28年)度からそれぞれ、推薦入試および特色入試を開始し、国立大学協会は定員の30%を目安に(上限ではない)推薦・AO入試の枠を増やす目標を掲げています。これにより、多くの高校で個別に対応してきた推薦・AO入試対策も、全体の30%以上の生徒に個別指導することは難しく、高校3年時の進路

選択において、一般入試、推薦・AO入試の双方への受験準備ができるようなカリキュラム・指導体制の整備が必要であると考えられます。

では、推薦・AO入試において、何が必要とされているのでしょうか？ 昨今の推薦・AO入試では、総合的な学習の時間や自主的な研究活動、社会貢献活動で学んだことを示す資料や論文の提出を求めるもの(東京大学文学部)ⁱⁱや、志願者が受験科目以外にどういったことを学び、活動を行ったかをまとめた書類の審査を通じて、大学で学ぶ意欲や志について評価を行うもの(京都大学特色入試)ⁱⁱⁱなど、高校在学時の総合的な学習の時間や受験科目外で行った活動の実績と、それら活動と進路(大学の学部選択)との結びつきを問うものが多くなっています。これらの背景には、日本の大学の研究分野における国際競争力の低下などもありますが^{iv}、基本的には、高大接続の観点から、大学での学びを意識して高校時代にどのような取り組みを行い、成果を上げたかが焦点となっています。

今後、より詳細な教育改革・入試改革の情報が開示されていきますが、SSHやSGHのような先行的な取り組みを促進するプログラムにおいても、課題研究は中心的な役割を担っています。また、新たな入試制度においても、課題研究は重要な役割となることが強く予想されます。

これまで課題研究を行ったことがあります。どのような準備が必要でしょうか？

課題研究に関する研修などを行う中で、ほぼすべての学校から「教員の多忙化」という声が聞かれます。これまで行ってきた業務の中に、課題研究を「追加する」という感覚で導入すると、その多忙化はさらに進みます。まず、管理職が中心となり、教育改革・入試改革を見すえたカリキュラムマネジメントの立場から、これまでの業務を見直すことをお勧めします。

- 課題研究の実施は、一般的に、以下のような流れで行います。
- ①校内における、課題研究の教育的位置づけの共有(どのような教育機会として、課題研究を位置づけるか)
 - ②実施に向けた準備(対象学年・クラス(担当教員)の決定、カリキュラム、学習計画(中間発表、最終発表の日程・意義)、評価項目、

基準の作成、授業や個人学習で用いる教材・ノートの準備

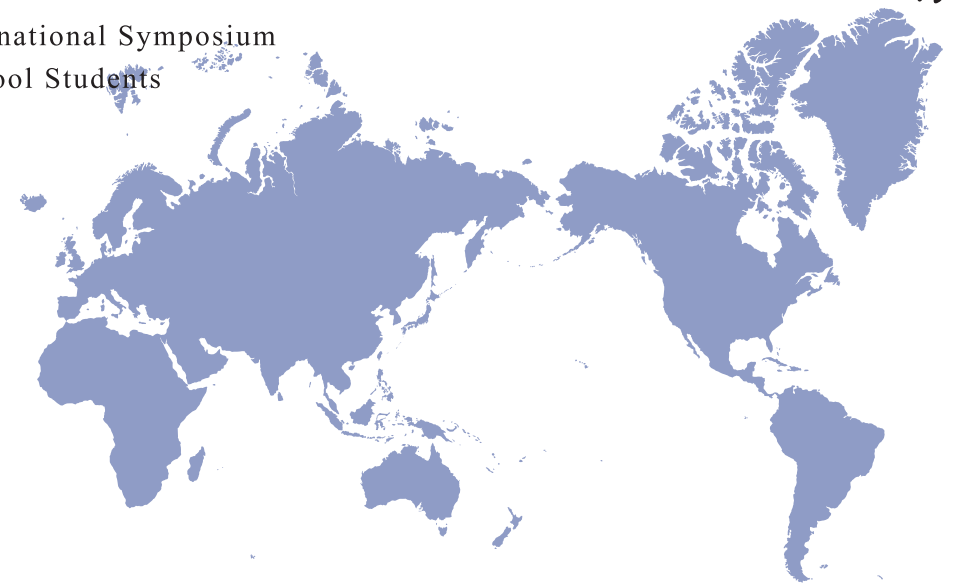
- ③課題研究の実施
- ④まとめと発表、評価
- ⑤指導上の問題点の共有、次年度への引き継ぎ

課題研究の指導体制を整えるのに、大体3年以上はかかります。指導の骨組として『課題研究メソッド』をお使いいただくことにより、特に初年度の課題研究の質の向上、(教材が文系・理系両方に対応できるので)校内での指導方針の統一化、個別対応への時間確保、教員の異動に伴う指導力低下の軽減、教員の負担軽減などにつながります。現場の状況に合わせて、補助プリントなどを作成しながらご活用いただければ幸いです。

i 文部科学省、2017、高大接続改革の進捗状況について2
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/05/_jcsFiles/afldfile/2017/05/23/1385793_02_1.pdf
ii 東京大学 学部入試 推薦入試 http://www.u-tokyo.ac.jp/stu03/e01_26_j.html
iii 京都大学 特色入試 <http://www.tokushoku.gakusei.kyoto-u.ac.jp/>
iv 例えば、日本の科学研究はこの10年間で失速していて、科学界のエリートとしての地位が脅かされていることが、Nature Index 2017日本版(Nature Asia, 2017年3月22日)から明らかに。 <http://www.natureasia.com/ja-jp/info/press-releases/detail/8622>

第3回 高校生 国際シンポジウム

The 3rd International Symposium
for High School Students



21世紀に生きる我々は
よりよい未来を実現するために
何をすべきか

日時

2018年 1月31日(水)、2月1日(木)

場所

サンエールかごしま 〒890-0054 鹿児島県鹿児島市荒田1丁目4-1

プログラム

- 基調講演 大阪大学副学長 小川 哲生 氏
- 講 評 株式会社オープン・シティー研究所所長、元世界銀行副総裁 日下部 元雄 氏
- パネルディスカッション テーマ「高校生にいま必要なこと」
- 参加生徒による研究発表コンテスト



Global Link
Singapore

アジア地域を中心とする世界各国の中高生が、科学や国際課題に関する考えや研究成果を、英語を使って国際舞台で発表します。
公式ホームページ: <https://www.jtbbwt.com/gsl/index.html>

詳細 ▶ 大会Webサイトアドレス <http://glocal-academy.or.jp/>

高校生国際シンポジウム実行委員会

一般社団法人 Glocal Academy, 鹿児島県立甲南高等学校

お問い合わせ

鹿児島県立甲南高等学校内 高校生国際シンポジウム事務局 (担当: 落, 太田, 堀切)

TEL. 099-254-0175 FAX. 099-254-0176

E-mail ochi-masahiro@edu.pref.kagoshima.jp

これからの社会で役立つ力を、この一冊で



A4判・カラー刷

課題研究メソッド ～よりよい探究活動のために～

岡本 尚也 著 168頁／定価 本体1,500円＋税

- ① 文系・理系の課題研究に対応
- ② 課題発見～研究発表までの流れを、段階をふんで理解できる構成
- ③ 課題研究に取り組む意義や概要、研究手法を系統的にわかりやすく解説
- ④ 豊富なAppendixや事例、ワークシートで、生徒の理解をサポート



A4判・1色刷

『課題研究メソッド』
完全準拠ワークシート集

課題研究ノート

56頁／定価 本体300円＋税

- ① 『課題研究メソッド』に準拠したワークシート集
- ② 課題研究のポートフォリオとして、大学の推薦・AO入試対策に



『課題研究メソッド』の指導を
サポートする教師向けデータ集

課題研究メソッド 指導用DVD-ROM

定価 本体7,000円＋税

本文データ、シラバス案、指導案、
授業用プリント、評価規準、授業用
パワーポイント、解説動画などを収録

『課題研究通信』創刊にあたって

課題研究通信をご覧いただき、ありがとうございます。近年、全国的に導入が進められている課題研究は、教育改革の中で重要な位置づけとなり、今後、それをどのような学びの機会としてとらえ、指導体制を整えていくのかは、今後の学校づくりの重要なテーマの一つとなりました。研究は、結果よりもその結果にたどり着くまでの過程に学習意義があります。また、指導法やその体制整備も同様、その試行錯誤の中に、多くの学びがあります。本誌や『課題研究メソッド』がその一助となれば幸いです。

『課題研究メソッド』著者 岡本 尚也